清俗紀聞

禮帙

卷之一　序

目次

年中行事

224

寛政己未年新鐫

竊恩館藏版

清俗紀聞 全部十三卷

東都書肆 尚古堂發行

清俗紀聞序

我邦之於清國也壤地不接洋溟為阻屹然相峙不通使聘各為一區域則其土風之異俗尚之殊何預我耶然閩浙之民航海抵崎貿易交市以彼不足資我有餘國家亦不禁焉朱明以還因仍已久其間不能無黠賈奸商干紀之虞則亦不可未安

之小吏也於是　官特置司以治之豈得
已乎是故承斯任者非知彼土風俗尚以
洞曉利害情偽之所在則亦無以宣我之
政而服彼之心爲此則其所當留意也曩
者飛騂守中川君子信在任于崎也釐務
之暇命譯人詢彼土風俗尚探討搜究而
叢爲清俗紀聞手自點定自節序之儀吉

凶之禮輿服之制黌舍之法以至庖室飲
饌器財玩具日用人事之微旁逮緇黃之
俗部分臚列獵採罔遺洵称綜該矣後之
官于崎者留意是書則可以免彼此枘鑿
之患而所爲皆中窾矣豈曰小補乎哉予
信余忘年交也天資高朗夙耽墳籍其才
之學之優將大有所爲顧此等編纂瑣〻

未事原無須揄揚但其一任不苟必期拔
本塞源如此則佗所注措可知也宜乎政
績烜赫物望歸焉纔踰兩載累被擢遷也
抑夫海西之國唐虞三代亡論也降為漢
為唐其制度文為之隆尚有所超軼乎萬
國而四方取則焉今也先王禮文冠裳之
風悉就掃蕩辮髮腥膻之俗已極淪溺則

彼之土風俗尚寘之不問可也而子信之
有斯撰自有不得已者也余觀今之右族
達官貴游子弟或輕佻豪侈是習而遠物
珎玩是貴即一物之巧寄賞吴舶一事之
奇擬模清人而自詑以為雅尚韻事莫此
過焉吁亦可慨矣竊忍是書一出或致好
奇之癖滋甚輕佻之弊益長則大非子信

之志也余為之序并以告覽者其豈欲呶
呶哉蓋亦有不得已者也寛政十有一年
秋八月述齋林衡撰

吉田直躬書

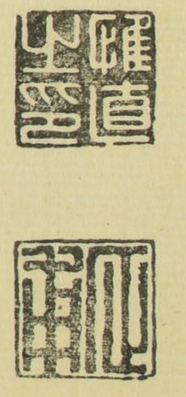
清俗紀聞序

中君子信之尹瓊浦敷化之暇命譯吏
就清商于館問彼民俗吉凶之儀節及
其名称度數即使侍史國字記之又命
畫師一一圖之編次成書名曰清俗紀
聞為巻六分部十三夫國於天地而有
與立焉日用彝倫推諸四海而無所不
準則奚必華貴而夷賤哉然必推中国

而華之以貴之者以其三代聖王之所
國而禮樂文章非萬國所能及也而今
斯編所載清国風俗以夏變于夷者十
居二三則似不足以貴重然三代聖王
之流風餘澤延及於漢唐宋明者亦未
可謂蕩然掃地也又清商之來瓊浦者
多係三吳之人則其所說亦多係三吳
之風俗乃六朝以來故家遺俗確守不

變者就斯編亦可以見其彷彿也我
東方古昔盛時聘唐之舶留學之員傳
乎彼而存乎此者乃皆三代聖王之禮
樂則今日民間通行禮俗有不與彼變
于夷者同也有志于講禮正俗者彼此
相質而折其衷則中君之此舉未必無
補於世教也豈可以餘閑笑玩視之哉
頃剞劂氏請而公諸世君俾予題其首

寛政己未秋九月　雪堂黒澤惟直撰



岡田顯忠書

清俗紀聞序

中川使君之奉職于長崎也布政視事勤且勞矣偶有暇日則差舌人繪工數名就清客於館咨詢其民間動作禮節名物象數隨而記之又隨而圖之一周歲而數十百及使君手親選擇取舍叙次編之分十有三部合成一書初清客之受問私舌人曰臣等小人生長閩浙其所能誦特閩浙

之俗到名物象數亦唯閩浙矣若夫清之
廣莫方不同俗俗不同物慈能其他之及
我北京盛京之間民俗名物多為滿也純
矣西南方或大滿而小漢矣其小滿而大漢
而以觀唐宋遺風者獨有閩浙而已然
則明府今日之求不必他及邪臣等亦不
能他及也蓋使冥之有形聲也其意有
二西陲之政回易莫重焉清之客猶我之
民矣非審其風俗明其好惡察其情偽
不可得而治也斯書而成後之奉職者長官
小吏咸將知所嚮焉一也誦法聖賢究博
致遠細大弗遺去民俗名物固不可以不考
諸後世而草野瑣屑固有詳載不亦爾事
乎彩書而成後之學者其或據什一於千百
焉二也夫清客通于我在亞不一而閩浙之
民實什之九則吏者之用閩浙而足矣民俗

名物五穀於經傳者要在於唐宋則書
生之需亦閩浙而已矣純滿大滿我於何
有夫如斯使君今日之求果不他及也客之
不能他及亦汝奚傷
寛政戊申七月朔蕉園霧士津國中井
曾弘序于江都錦林客舍

曾弘 霧士

附言

○此書は晴陽が来る清人が其國民間の風俗を尋問一々此邦者語ふ直して記せる處なり素より清國東西風俗異なり南北俗を殊にすれば此編をもて普く清國の風俗と思ひ誤る事なかれ今晴陽が来る清人多く江南浙江の人なれば新に記せる所も亦多く江南浙江の風俗と知るべし

○圖繪は晴陽の畫師を清人の旅館に遣し聞ふ随ひて圖し彩遠ふ事あれば清人即ち其を正し或は清人圖して示すものも多し問答數度みして始て全き事成るを見ふ者なるべしを生ずる事あるべし

○片假名を以て右に附るものは唐音彩り平假名を以て右に

附る者ハ讀契又ハ和讃世話ヲ附る者ハ和解の仮名ハ但和解あく
面有よ唐音ある者ハ右よも讀要又ハ和讃を附る者もあり和解
の仮名原通事ハ如是ハ長崎語多く同く脫ける者あれハ見女
表為よ是を補ふ此段ハ一事よりて和解の語同ラ仮名ハ有ハ見ふめ
よ紙〳〵考ふべし

○吉凶喪祭年中行事ハ類清陽在留の清人時く行ふ所之是其器
を見るに見ふ器械器弄の類も又嘗く此邦人来舶する物親〳〵く
見る家圖中事に多く新を以く其除渡ふ記事我推て知べし

○答問僅ハ一年の間よりて考ふ公務ハいとまもあらざれハ遺
漏ふるの多〳〵此後寿陽ハ知る人是を補ふ事ハ〳〵ハ予が
望ふ所なり

清俗紀聞總目

○禮帙
卷之一　年中行事
○樂帙
卷之二　居家
○射帙
卷之三　冠服
卷之四　飲食
卷之五　閨學
○御帙

卷之六　生誕
卷之七　冠禮
卷之八　婚禮

○書帙

卷之九　賓客
卷之十　羈旅
卷之十一　喪禮

○數帙

卷之十二　祭禮
卷之十三　僧徒

清俗紀聞總目終

清俗紀聞卷之一

年中行事

○年始ハ在京の官人ハ朝服を着し朝珠を掛け開掍とて皂隷二人捧を持先拂つゝ主人ハ轎子ハ家僕従ハ京城内みゝ定乃人数あつて執事等も排列をふ事成群れ官の高下によりて八人或ハ六人附従ひ午門外ハ留置条内する事也拝賀の次第ハ文官ハ東側ハ列し武官ハ西側ハ列し其品級ハ隨ひ一班二班三班と跪ゝハ列を分一同ハ萬歳を唱へ三跪九叩頭の禮を行ひ拝賀を一班ハ一品より二班ハ義品まで三班ハ義品以下退朝の後名帖を持帖ハ全帖あり赤列を分ふ次第ハ綽ハ姓名を書ゝ諸衙門互ハ往来して年賀を述ふ且七日迄ハ外出の時ハ名札を紙ハ祝詞を書り

勿論家屋鋪ハゆゝも朝服を着用ひ

全名帖

新賀禧

某姓某名恭

○京外の官人ども元朝みの朝服を着し閑棍の皂隷行牌凉傘旗等
先み備へ跟随の者多人数召連其所々の寺廟み安置あるふ今上皇帝
の龍牌み蒲く拜賀し龍牌を本ほく掖庭嚴し天子萬歳萬萬歳と書載そ
寺廟ごと併前み安置し外み殿閣等れ據いおし
玄品級みよりて行列等ち差別ちあるもとぐも詳みおぐ〻年始の時
ち任持役僧ち連門前迎迎送し又人みよる役僧の〻接扱するも
あり又ち知府知縣等の官ち名帖ち持帖ハ全帖前み同し上司官則へ渇し
年賀ち述ふ十日まぐいの朝服を着用せ

○官人庶人とも元朝みい先衣服を改め天地を拜し庶人とも天地を拜すふ
天地の恩ち謝する事ハ古よりれ仕来ち事
次み家廟の神主ち拜し両親をも拜し召使の奴僕ハ
新衣ち着し主人を拜す玄外套ハ着せふ衣を薪ちし家廟みち
香花燈燭年糕菓子柔飯酒菓み橘子菱子竜眼肉の類を燒物

の鉢皿猪口等み盛り供へ教糕の製法は教底手糕を製するが法なり
方みむしろに外出し喜神の恵方神廟佛院み点茶焚香燭は寺廟みを
備へおよび携へ事終り惣じて寺廟みをもとく水盥を設けが故
家内より手代浄め手水差水入用の附り寺中へ元用ふなると三日近の内より
親類朋友ども方へ名帖代持行帖は草帖なり赤紙み祝詞朋友内は門口
みへ祝詞を述親類又は親しく紀方みへは酒年糕等を出し祝ふ土地
みへは屠蘇酒を制し江南浙江辺みへは絶て用ふる者家内みへも関ひなく
其客みを出す事あり風大戸の向ふ跟随二人或は三人召連遠路
あるべ轎子馬代用は十五日近の内み年礼を述其客の内空腹の者へ
煖鍋とへ此方の鍋料理みみ仕立へ外み小菜は鉢ものはけ垂食せ
ざむれ品物左の通り

○煖鍋　緑豆麪　雞　鴨　肉圓　香菰
冬筍　火腿　海參　魚翅
右の品煖鍋の内みへ煮立へ有るを代賞翫せ
○小菜　魚　火腿　鹽蛋　蝦米　鹽蘿蔔
炒骨　青菓　紅棗
右煖鍋小菜料理の品を定式みをあれど有合みにて多増減すこの
外年始とて此方の雑煮吸物みへある式は如し

單名帖

新賀禧

某姓某名恭

封筒

露申

請帖

翌午寅治春茗春醪奉迎

高軒祇聆

大教伏惟

早賜惠臨勿卻幸孔

右啓

大德望某號某姓老大人臺下

侍教生某頓首拜

封筒

露申

元旦ハ試毫ニて吉利の文句を赤紙ニ書て元朝繁用ス其者ハ便宜の為ニ除夕ニ認てむかもあるを惣じて元日ハ吃素の者多く年の始ニ慎む也ハ深く慎むゆへあり三日比より春酒或ハ新年禧酒ハ親類朋友互ニ招請して酒宴を儲く料理ハ貴賤ニ応じ差別あるを事あり庶くまり献ぞの帖 請帖を以て前日ニ案内ヲ入る帖ハ親類同輩ハ単帖を用 女婦人ハ糸會ハ只實父母の方へ年賀ニ行ゆく

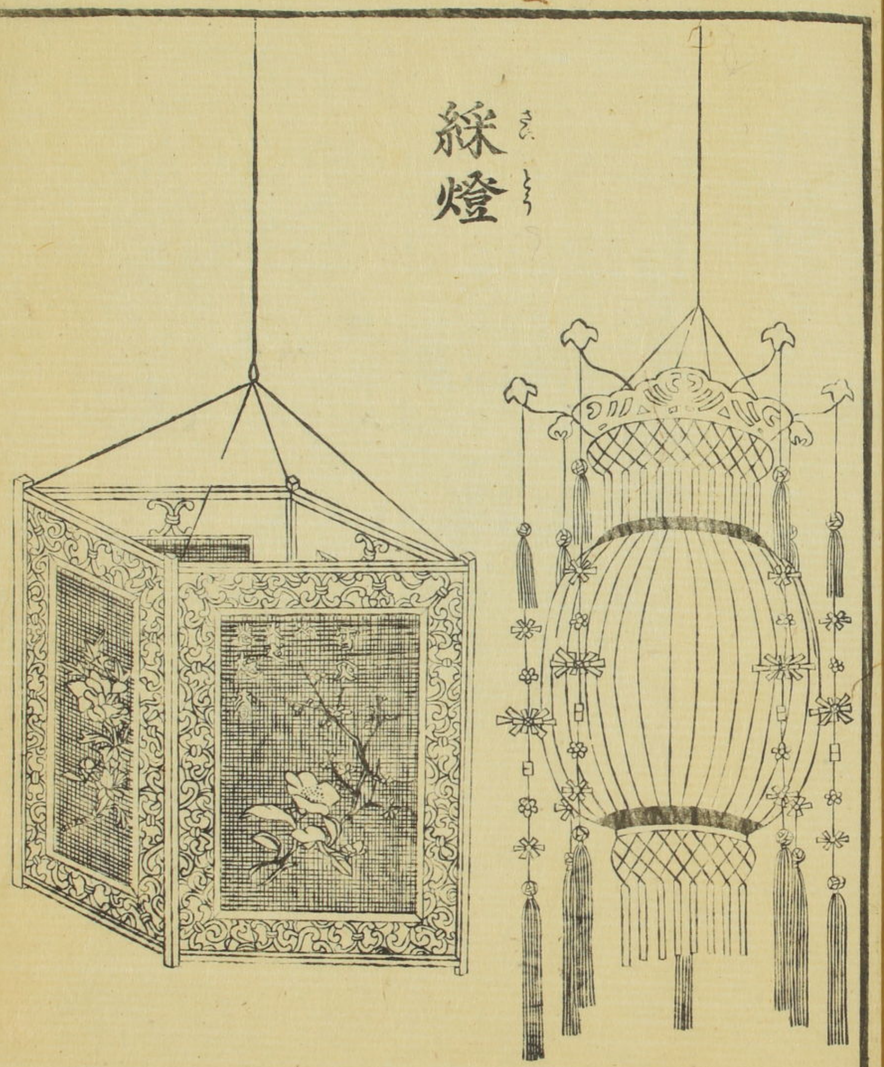
○商家ハ元朝より招牌を立て店内店ハ商賣ハ暦の開市と云ふ日ニ招牌を掛る此日店開の祝ひとて手代その不ハ商賣仲間ニ酒宴を設く船ハ出行とて云ふ日ニ乗初ル也

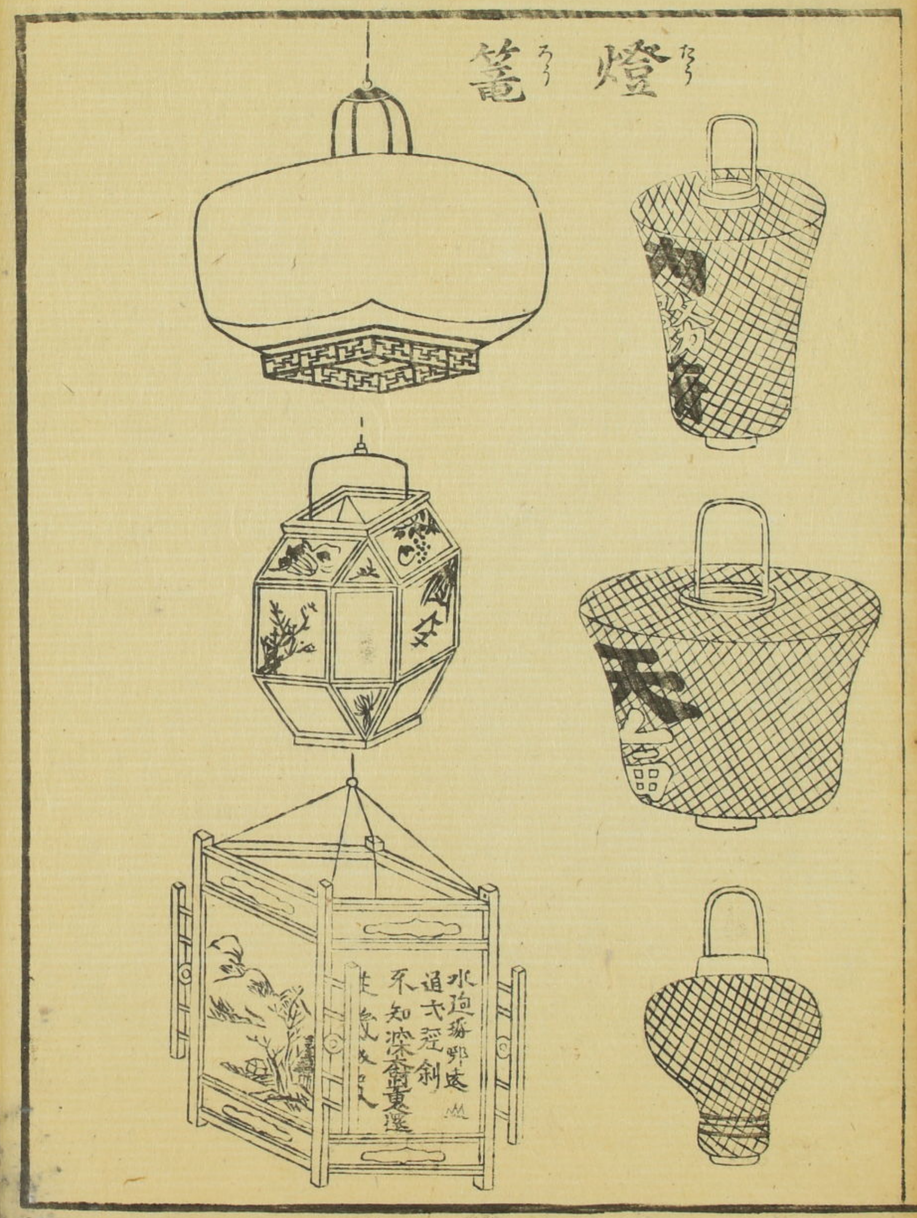
○店卸を盤帳と唱へ開市の前後ニ掛とて手透を見あらゆる前年の商賣銀高ハ品物有高等帳合勘定也

招牌

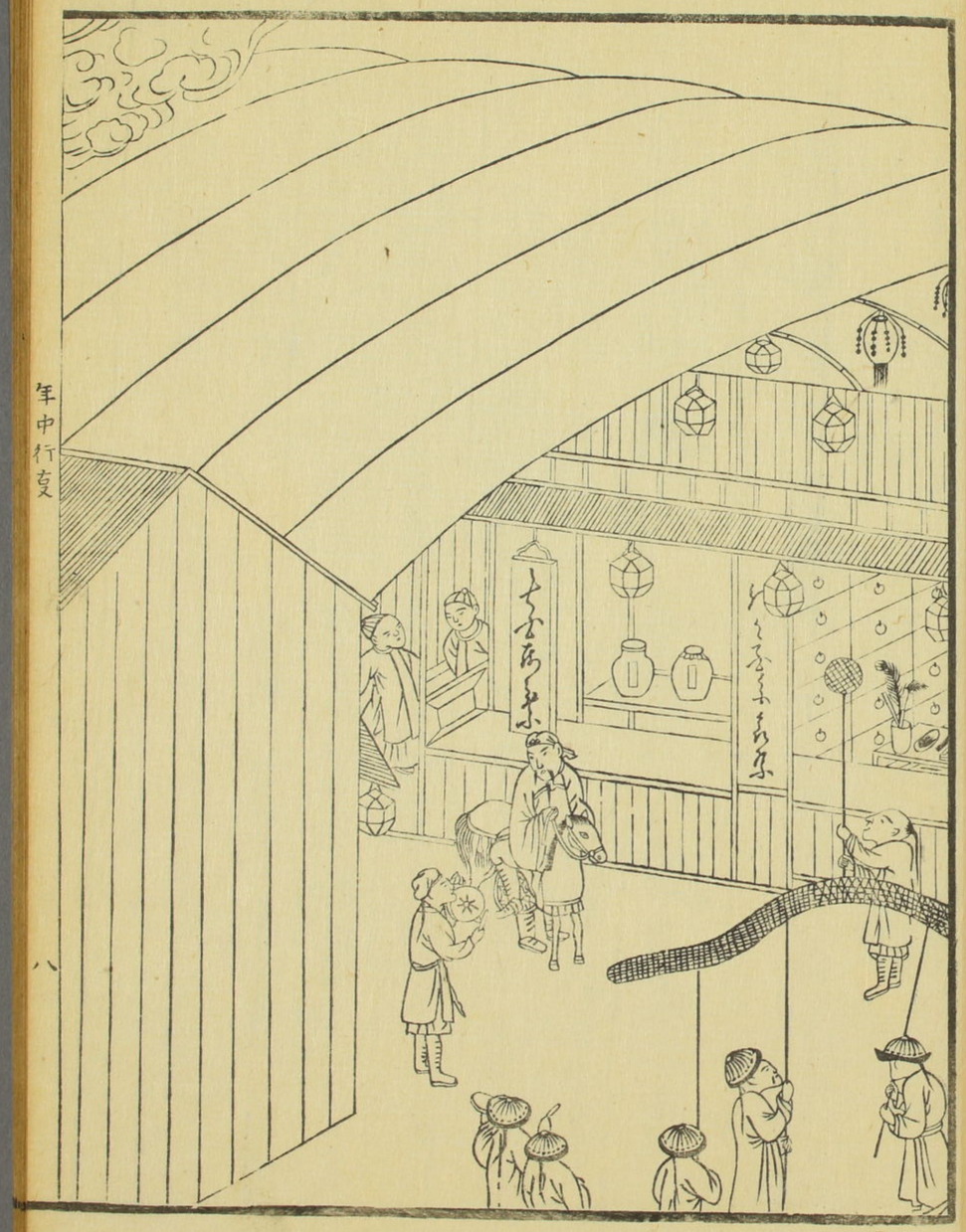
松茂號定織紬緞發販

○醫家ハ神農の像ヘ年糕菓子菓物或供礼拜し六日迄み收むる酒宴或設け親友ゑゞ招く事ゑし○正月七日を人日八日穀日九日を豆日十日或綿日と唱へ此四日天氣和晴あるハ豊年ありと云傳ふ七日ハ人の始く生れゑる日と人日と唱ゑし故ゑ浙江魚の人ゑ斤量をゑゝ高身體の量日或かけ試ゑ足を秤人ゑ江南魚みくい立夏の日みを かゑゝ夏渡せゞゑ為ゑりきつひ傳ふ○正月十三日或上燈十五日を元宵十八日或落燈と云此六日の間或燈夜と唱へ十三日夜よゝ家〻の門前ゑ燈籠を燒し官府富家の向ゑ門前ハ勿論堂上ゑゑ樓上ゑゞ結綵ゑく紅縮綿を四方ゑ張ゑ両端を拄或ゑ上檻等ゑゑ垂ゑ羽〻ゑ花の枝ゑる形ゑ結びさげ種〻ゑ彩燈籠を燒し玉羊角等ゑく酒宴を設け家ゑゑ糸竹等催す事あゑ張ゑ





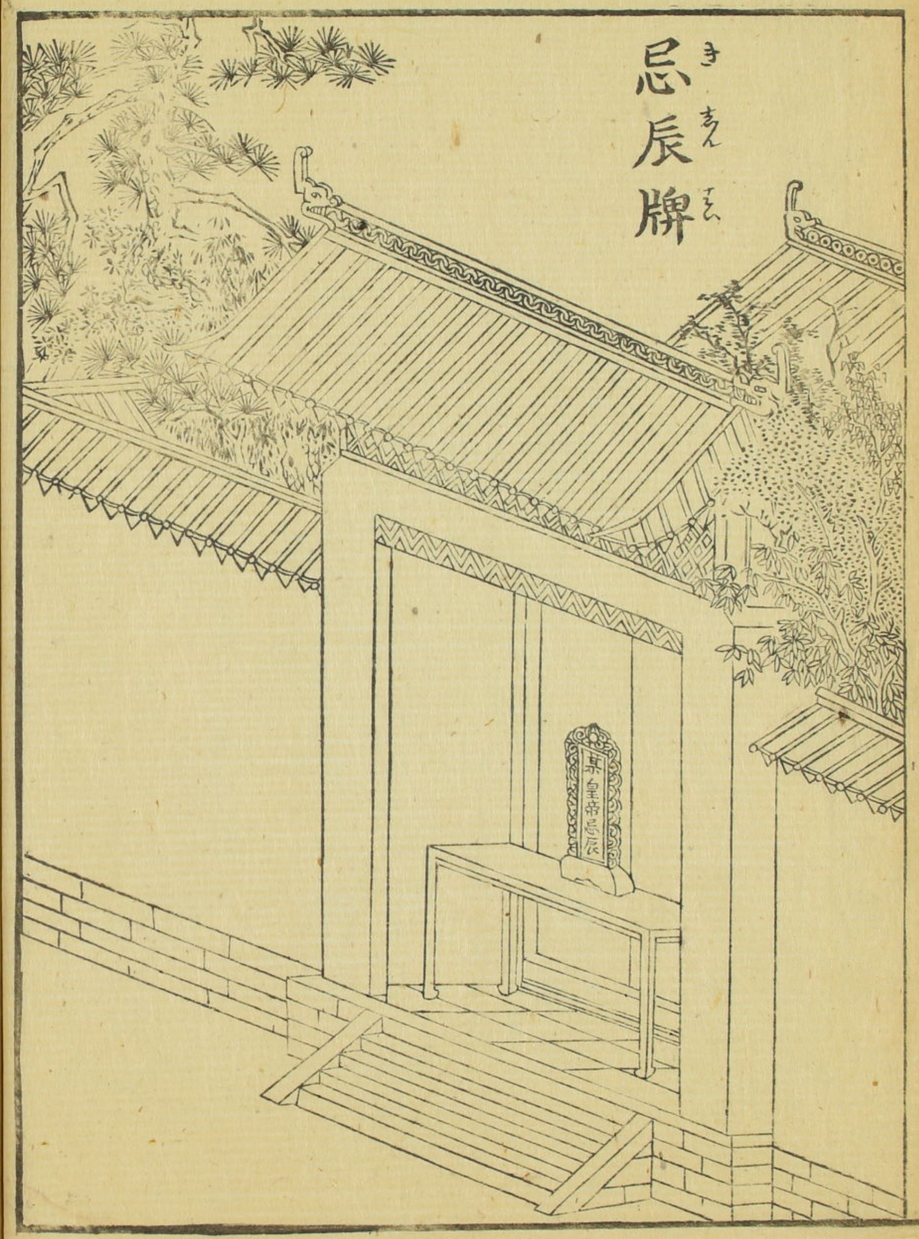
○燈夜の間々市中は空地み戯墓を拵へ俳戯を催せ又在町通大家富家位居の町筋みゝ燈棚ゝく此方の軒より向の軒へ互み竹或渡し上み木綿の幔を掩ひ麻縄を二番種くの傍燈籠を掛燃し其外街上へい行燈とて若者ども打寄龍燈馬燈獅子燈なども其外魚鳥の形色々拵へ竹みく形成後り紙みく張彩色銅羅太鼓等をのゝく雑し燒籠を持ひ町筋を踊り歩く左様向みよる裝束等同かゝ就中籠燈い長さ四五間み造り数十挺の蝋燭或燃し数人みくほゝ右数多の行燈乃内或ゝ大戸如音形ゝの方へ行踊ゝ事あり其所ゝ酒肴を勧又銀を賜ゝ事あり諸御門兼ゝく庶人猥り入出ゝ事を禁ずれども十五日上元の夜ゝ燈籠見物の多ゝて出入を絶ゝ放夜ゝ別ゝて閙熱みゝて十八日落燈の夜まて終ゝ



燈棚
行燈

○先祖の畫像所持せ者は除夕より堂上へ掛元日より三日迄供物等整へ
十五日ゟ供へ落燈の日取收む○毎月朔望ゟ天子便殿ゟ出御
あり諸官人朝服ゟ宮内拜賀に在外ゟ官人は寺廟ゟ家内
竜牌を拜に庶人は年始の外ゟ朔望五節句ゟ定式ゟ廻礼ゟ事
なし○皇帝聖誕日ゟは大小の官人年始のごとく朝服を着し宮内
拜賀す在外の官人も寺廟の竜牌ゟ拜賀に元日冬至聖誕を三大
節禮と唱ふ○毎月國忌ゟ大祖高皇帝ゟ以後代々皇帝皇后
の忌辰ゟ諸衙門門前ゟ案を置其上ゟ某皇帝皇后忌辰と
書ふ牌を置諸官人は素服を着し終日政務を理せず民間ゟも做戲
ゟ勿論銅鑼太鼓等一切鳴物を禁ず○毎月朔望ゟは先祖の神主へ
香燭菓子等を供へ禮拜を又開祖考妣並ゟ祖考妣顕考妣の生

誕日ゟ廳堂ゟ其人の畫像を掛香燭三牲等を供へ祭ふ（三牲の鷄羊猪〻を略して鷄魚猪肉を用ふ）
○正月十五日天官の誕日七月十五日地官の誕日十月十五日水官の誕日ゟ此三
尊を三官菩薩と称し誕日ゟは諸人寺院ゟ宮宿を天官は福を賜
ひ地官は罪を赦し水官は火災を除く佛故別して信仰のもの多く
家内ゟ供物を祭ふ者あり○毎月二日十六日を近福ゟと称
五路財神を祭ふ（趙玄壇を本名とし招財招寶利市納珍此四神を服色とす）家毎ゟ三牲香燭を供へ
或は神廟へ奉献を錢財を司ふ神也へ諸商人重ゟ祀ふなり
○正月二月三月の間小児ども紙鳶を揚ふ（紙鳶一名鵝子人形胡蝶或は魚鳥の形様あり大小多くあり）ゟ風筆
を竹を弓に形ゟ曲綸子紗羅等の幅二三尚程の切を張ゟ掛紙鳶の端
結着揚放て風を受鄭音を成ゟ故ゟ風箏と號く又児女共ゟ見踢て
鷄毛三本又は五本錢ゟ挿結ゟ包を是を蹴と戯ふに


忌辰牌
皇帝忌辰

年中行事

○二月二日土地神の誕日あるく家〻香燭供物をゝ又神廟ゑ奉祭する者もあり廟前ゑ於て戯臺設さらゝ傚戯あり

○二月上の丁日諸州府縣の聖廟ゑ官所より釋菜の事を行ふ

庶人ゝ奉祭致許さず

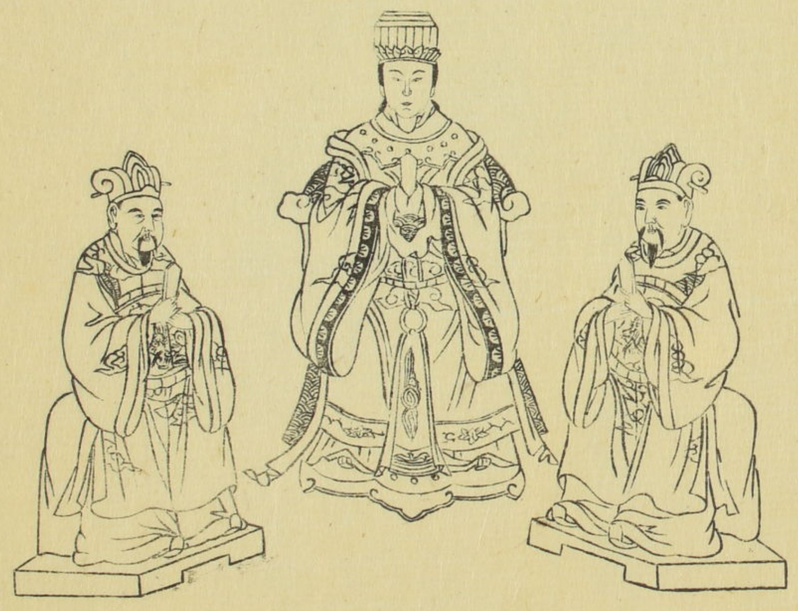
○二月十二日百花生日ゝ花朝と唱へ一省ごゝゑ安置あふ花神廟

花神は都合十三體あり正月の花神は手に梅花を持二月は杏花三月は桃花四月は薔薇花五月は榴花六月は荷花七月は秋海棠八月は桂花九月は菊花十月は芙蓉十二月は山茶花十二月は何れも紀あり臘梅閏月は牡丹花を持ふ神像致安置に係らせまゝ知るべし

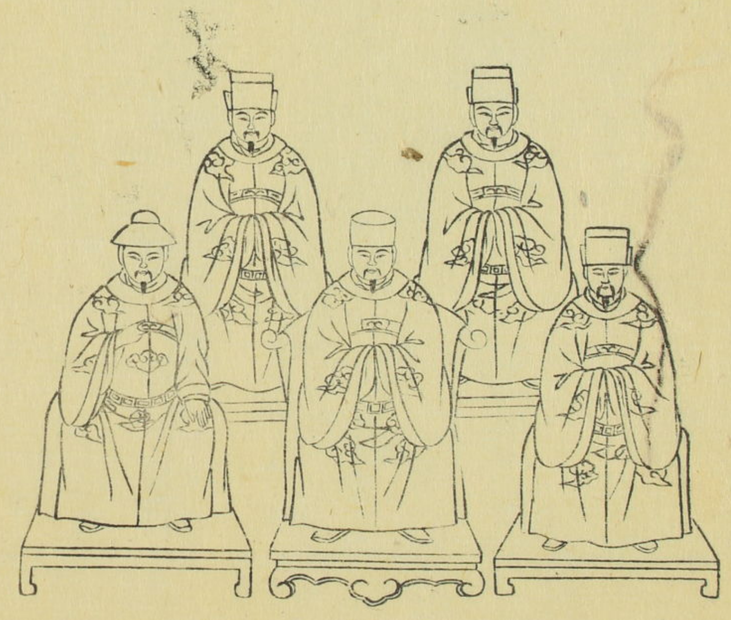
諸人奉祭をなす花園あふ一切は庭上ゑ卓致菓子並ゑ時候の菓物香燭致供へ花神をゝ常〻衣服裁除の小切を貯へ並何色ゑ拘らず此日園中の樹ゑゑ結び付ふ色い花葉しく紙實致むすゑ為あり之を傳ふ

○二月十九日觀音菩薩の紀日あり諸人別して信仰の佛少へ香燭致多げきえん寺院ゑ奉祭をふるものなり

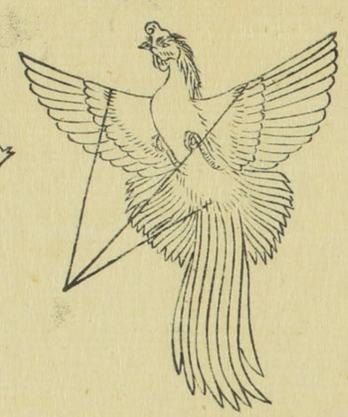
三官菩薩



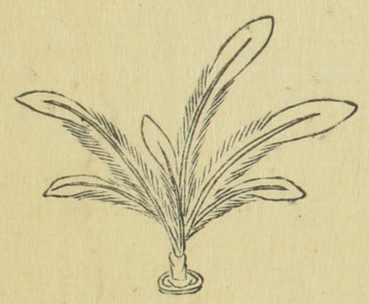
五路財神



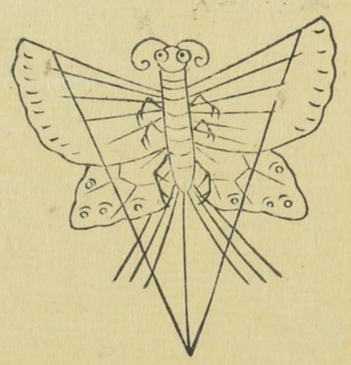
紙鳶



箏琴



蹋鞠



見蹋

風箏

○上巳の日家々菜蓴花を門戸の左右其外灶上床上等へ挿置蛾殘襲
せゝび傳ふ ○三月清明の日家々柳枝を門戸に挿諸蟲生ぜざる
為なりとゝびはふ ○三月清明の節に掃墓少て一名掃祭と云貴賤共同姓
の一族先祖の墓所へ赴き三牲並に菓子菓物等殘器に盛り卓上に供へ
香燭奠酒燭〻酒を注ぎ奠し冥衣大金を燒冥衣は紙を畫きたる紙大金は金箔を置ふ紙なり都て靈
魂へ衣服金銀殘物等を贈る意なり 禮拜畢て供物等殘近邊の野原に推門行祠堂あるか者は祠堂
に打宴席を催し又杭州辺へは西湖に船殘浮べ遊ぶもあり官人とても朝服は着
せび轎子馬等を諸人とゝも隨意に用ゆ跟隨の多少は貴賤に寄等かゝび
一家老少一同に出る内婦女は多く乘ゝび他家に嫁したる者は極て其
家の墓所へ出行也 嘗て年毎とゝの乘らびたる事もあり京都にも同様の儒生
とゝも異ふる事なく家廟に供物等あり祭式年始に如ぢ

○清明の内諸州縣共に勅命を奉ゝて其地の城隍廟の神像を轎子に
清ゝ 往古より知府知縣其外の官人厚使ある人を後に立て勅命あり廟を建て安置し其
所の守神として是を城隍崩と名付譬ば何地の城隍は何の代の何官と云人所〻同かゝび
儀いの事儀ゆく首手足の動ずに拵へ衣冠等は其人在世の先に銅羅を打鳴し次に行
品級に隨ひ作る且城隍の前にあるゆゑ城隍廟ゆゑ
牌二対 行牌は長さ三尺五寸程幅一尺七寸程の塗板に三尺程の柄をはめこむ板に
奉旨祭祀と彫こむ一対何も金字なり 旗數本涼傘
一本鸞駕數本銀立列旗 鸞駕は錫に鎗鉾等
等の類殘作りたるなり 轎子の疎に鼓樂殘奏して
諸役人郊外の墳墓あるに別に送る行祀孤の為に幕を構ある廟壇に
清〻 廟壇は別に草葦の假屋 椅子を置儀殘居前に三牲供物等を卓
を設け茶呑れば云ふを
上に並べ其所の子孫吊ふ者あき云縁の亡靈を祭る是を祀孤と云本官に
らびに諸官吏等禮拜を云ふ後諸人奉行し知府知縣を生民を司る
故に陽官と〻城隍を亡靈殘司に故に陰官と唱ふ府に並べ知府縣に
並べ知縣の格式に行列也

○三月十五日趙玄壇の誕日なり家々供物等近福の附物同じく玄神廟に奉祭する者もあり玄壇は殷の總兵官を勤めし人なり幼年の時深山に入り仙術を學び種々奇特ある故諸人是を尊敬し後周の武王紂王を伐ち死せし死後神となり上天其德を感じ神に封じて錢財を司る故に故に諸商人專信仰せ

○三月廿三日は天后聖母誕日の祭あり又二月八月春秋の祭も上の祭日に用ゆ此二祀は廟宇に倣戲ありて諸人奉祭

○一家一家紹神必走洋の人々都て信仰し家内の廳堂或は外の間に安置し香燭菓子菓物等を種々に清淨なる別に神像を安置し香燭菓子菓物等を種々供奉なり

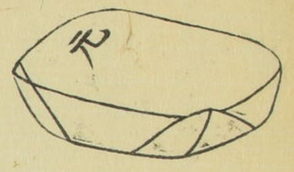
○立夏前後帽子習の節は前廣に朝廷より幾月幾日換戴暖帽と云ふ宣旨諸州縣に降し右の宣文を板に書各衙門の門上に掛ふ諸人是を見て其日に至て涼帽に改る暖帽へ

九月寒露の前後同様に宣旨あり左衣服は氣候の寒暖に隨ひ勝手次第に著用せしむ宣旨降る事あり轎子は四季ともに用ゆ

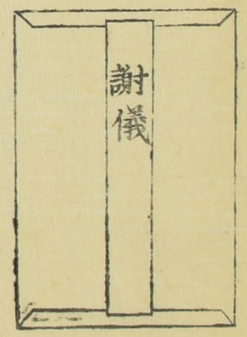
立夏端午中秋冬至歲暮此五節に書學の師其外醫師等へ金銀端物を以て謝儀を贈ふ端午中秋歲暮の三節に送る者もあり且書學の師に一節に元宋銀二十目程白紙に白紙の袋に入れ上に小長尺赤紙を掛其上に代儀又は謝儀と書下に姓名を記し左圓銀に入れ内包の紙に元と書一切銀あれば星と記一量目を書し銀の數を記し別に帖等用ゆる事好し拜匣に入れ遣し醫師への謝儀は疾の輕重に家の貧富によりて齊かし

○四月八日釋迦佛誕日なり寺々九條龍亭を堂中に設け龍亭の内に盆を居自擅なり刻なる釋迦の立像を置右九條の龍口より香水を

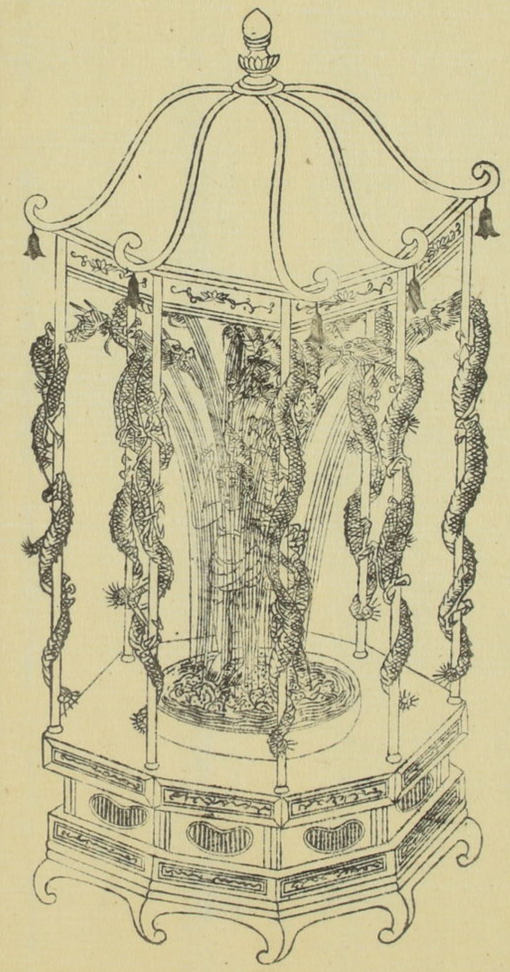
銀錠包法



封袋



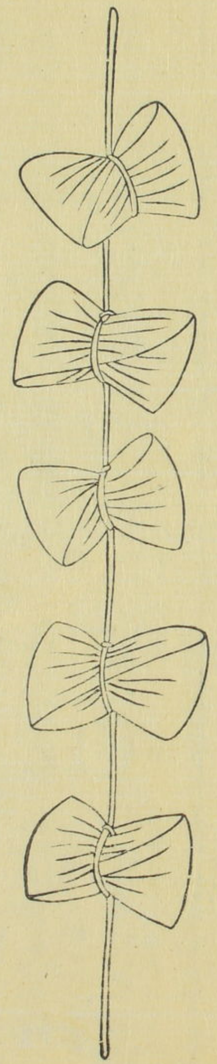
九條竜亭



吐出し佛躰を灌ぐ住持あらびに大衆等簫笛を吹鈴を鳴し小鼓雲鑼等を打樂作奏し佛事を行ふ設け諸人參詣多し左一所にて浴佛多比執行なく唯常に安置あり釋迦佛へ參詣ぞふ地方もあり

○四月十四日呂洞賓の誕日呂純陽先師と称し廿八日神農の生日なり此両日醫家より畫像を掛三牲菓子菓物等供へ參り親類朋友を招き酒宴を設く○五月小朔日より五日迄八月より十五日迄十二月八十五日比より晦日の夜迄此三度諸州府縣ともに掛賣金銀貸借等変筭を右の期に至り先銀高の書付或遣し是迄の日限まで取立か右銀高の書付或遣し送帳と云清筭あり是べ書面を消

商人へ返し○五月五日端午の佳節に家々粽子を拵へ一名角黍と云糯米を灰汁に浸し蘆葉にもて三角の形に包み麻皮にて結び蒸し或煮る又雄黄菖蒲根を細末し飲酒



粽子

健符

五月午時に至りて是を欣幼少の男女みな大黄大蒜菖蒲根をみじ
糸に貫き身元に掛さげ又雄黄の粉を酒に交面部あなく塗邪気を
避くあるいは口に含堂の隅くみ吹掛ふ是は毒蟲を禁ずる爲なり婦人は
指爪紙もつて人形虎蛇蚣蜘等の形をかく簪に挿し頭上に挿す是を
健符とふ且堂上にも鍾馗閻帝畫像紙掛前に菖蒲艾葉を花瓶に
挿門戸の左右にも赤紙にくく根を包み挿盃くはさ赤爺に左の文句を
書門戸其外にも張ふつぶも邪気伏排意あり

五月五日午時書

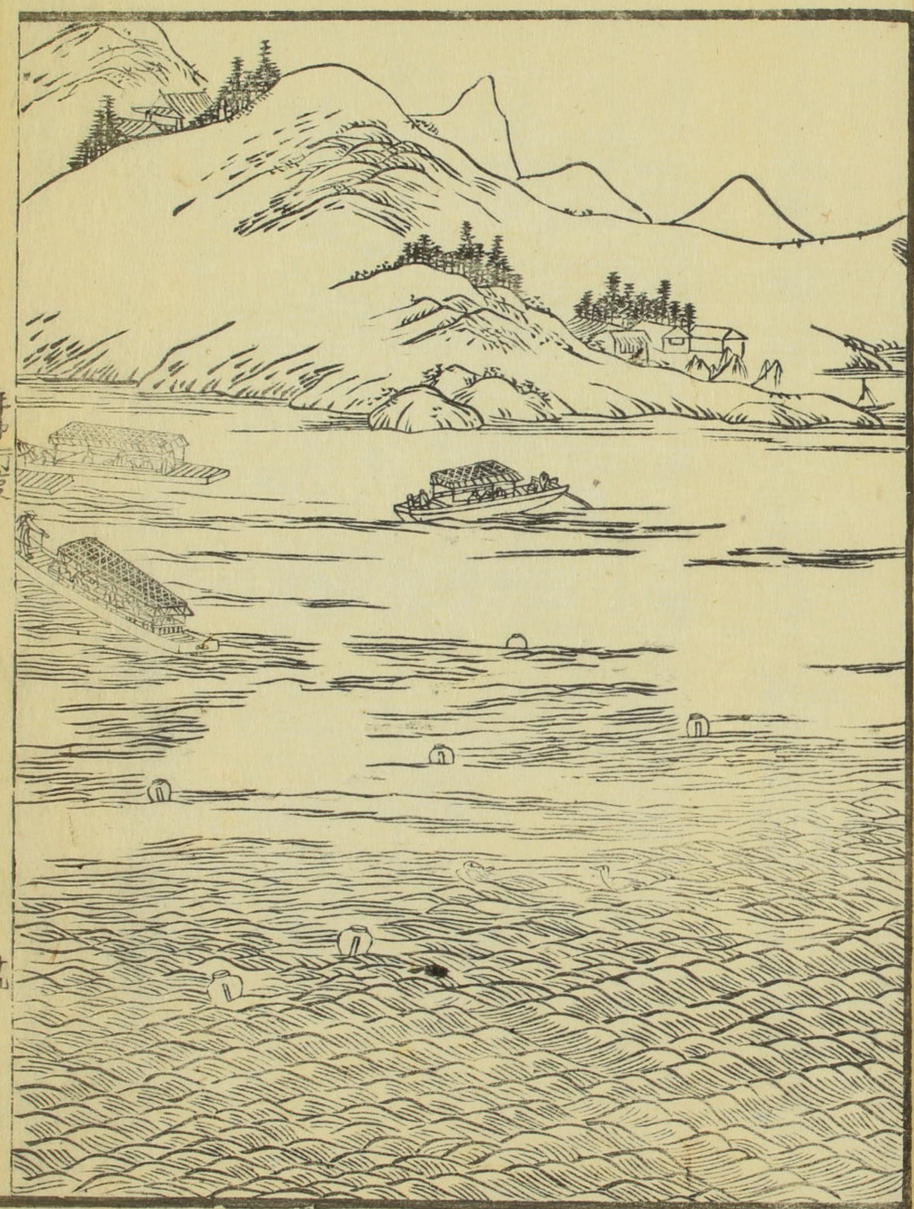
赤口白舌盡消滅

菖蒲如剣斬八節妖邪

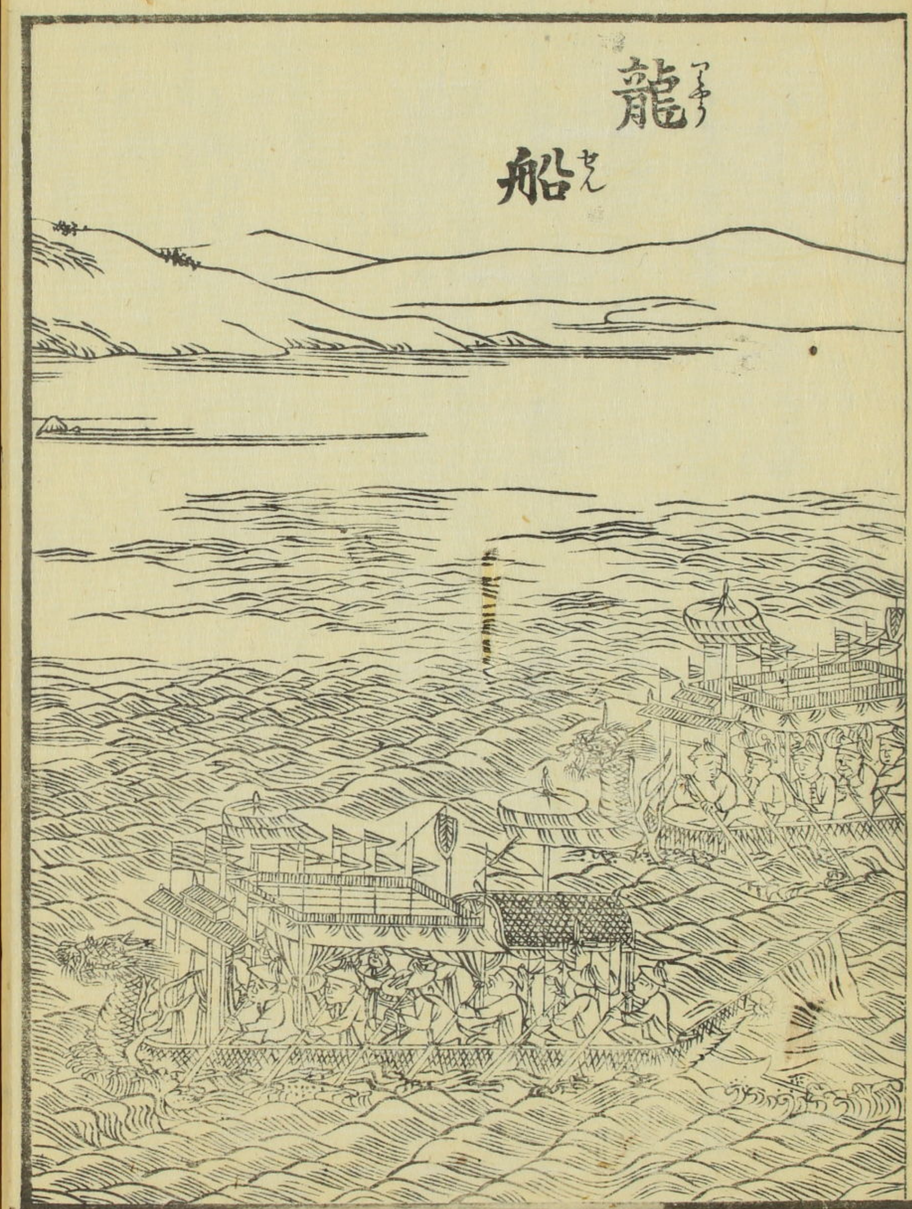
艾葉如旗招四時吉慶

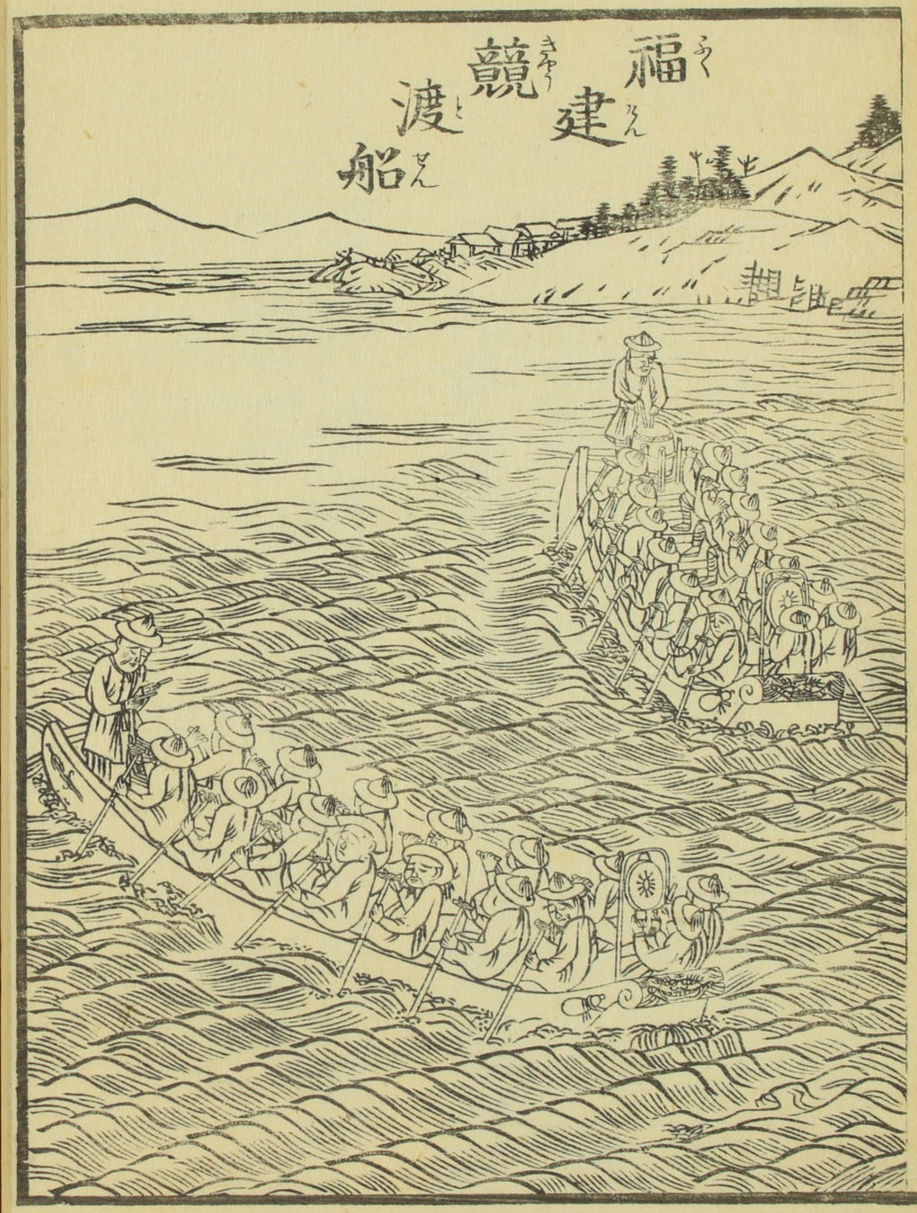
○五月五日山野に遊行し藥草を採製法して芸田に置事あるは又常にも採貯ふ者あり○同日にちなみ親類互に粽子並びに魚類猪肉雞蛋枇杷梅子等時候の菓物を本盤に盛合せ送ふ也八月十二月も都合三度の賜物あり是を三節禮と云ふ何れも四種六種送る都て半の數を用ひ也○朝日を六日近江湖に云ふ北方八數艘の竜船を浮べ競渡せ船を長さ五六間幅二間程艦に竜頭艫に竜尾を造る船の全体に竜鱗を畫き都て彩色を加へ竜の水上に浮べる勢に倣ふ表に牌樓あり（竜を竜門と云ふ）其上に涼傘を竪て竜門の四柱に旗を挿次に二重の臺有臺上の中央に涼傘を竪て四方に旗數本を四三列に次に亭成備其上に亦涼傘有亭の両脇に楠于成構是に旗數本を四三重艫に長き大旗一本竜尾の上に斜に挿傾旗涼傘に程く緋四鏡緋子縮綿等に縫箔して美麗を尽す

雨中に油旗を用ふ（油旗を紗綾縮緬に桐油を塗る故に不成）一艘に人数六七人を臺の下に有銅羅太鼓吹物を鳴し二三人は亭の内に有て闕刀を把る（柄を青竜刀の形に造る故に闕刀と号く）船の進退後模を司る十人餘は両方の舷に並居て櫂を汲て加る船に早く成事を競ふ故に見物の諸人は家鴨成放浮べ或は酒壺の内に賞銀何程誰何某と記したる書付成入口成封じ水上に流す成竜船の者先を爭て取得る成勝と成福建の地方に長さ五六間程幅一間餘の船を拵競渡に竜頭其外旗傍等いろ〳〵銅羅太鼓等打ふ〳〵数十人乗組競渡せ玄官有て許成受ふ者もあり〳〵敢て禁止ふ事もなく多人数集りて成事也爭論等ふに制禁すふのみ何是の代よりたゞ有ふと云ふ事い審ふ〳〵也古より屈原を吊ふ為乃遺俗ふと云傳ふ



年中行事

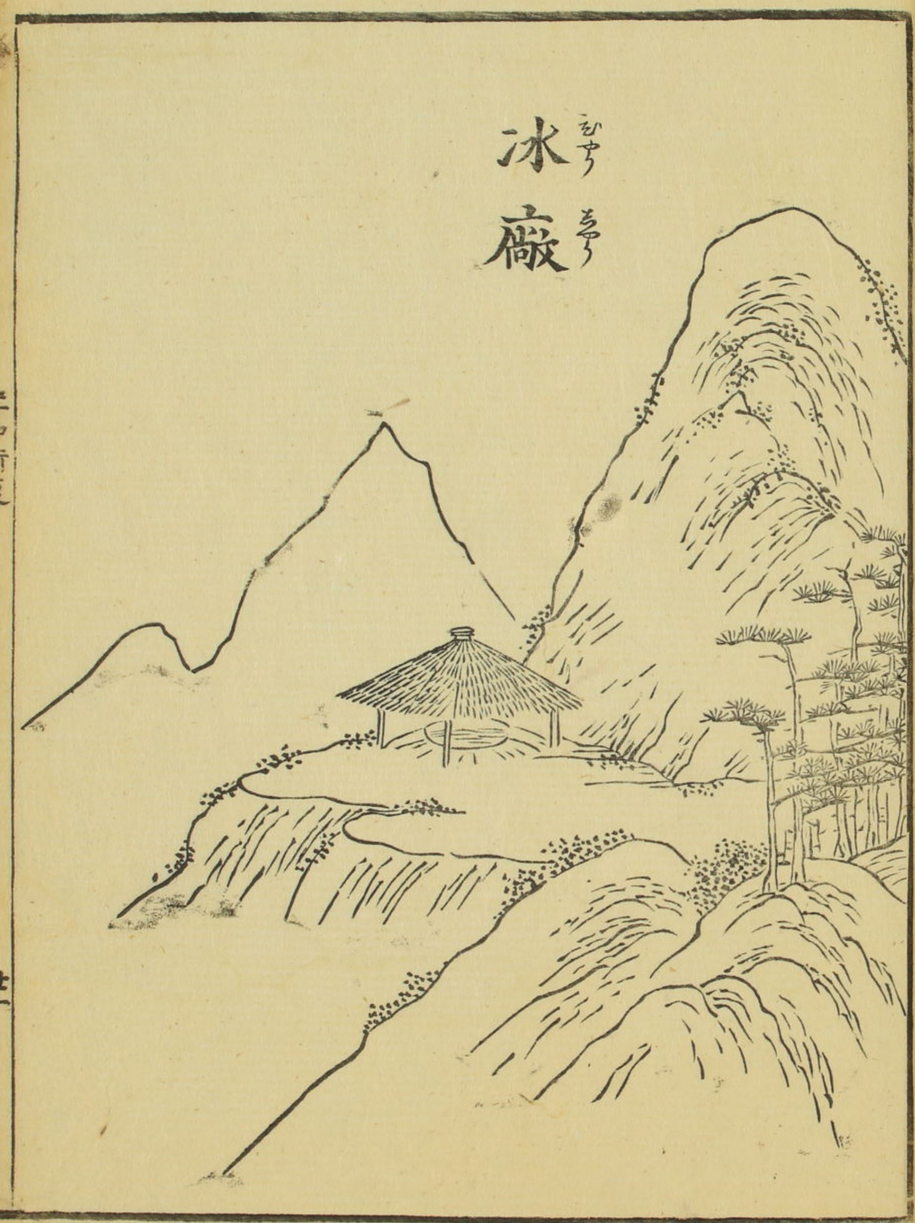




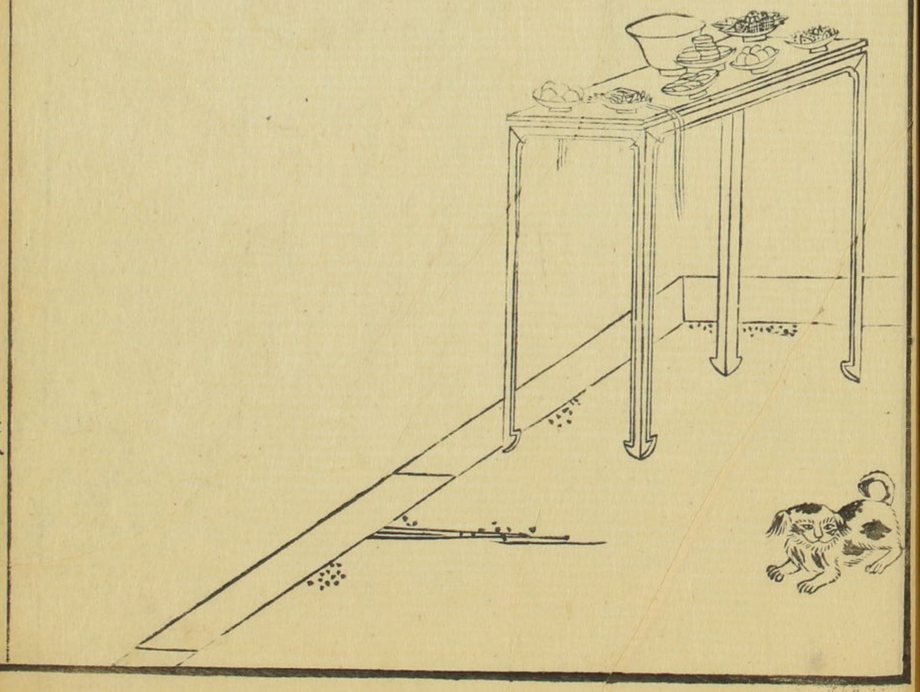
○五月十三日は關聖帝歸天の祭日二月八月上の戌の日或春秋の祭日と
神廟何れも祭祀あり諸人信仰の神鼓家に神像に香燭三牲種々供物
を一深く尊敬す○同月或竹醉日と唱へ竹を裁すべ根付窪み中
に傳へ○梅雨中湿氣或拂ふあり或蒼朮を焚尚又書房又は芸香
を焚又是は書籍の蠹魚或製衣する也○六月六日天氣快晴なる
時は諸人多く書籍衣服等を曝す○同日小麦貯へ醤油を製
する事あり亦此日より限りて三伏の内天氣快晴の日或見合製造
其製法等詳なる
なる者也 飲食の部に出す
亦塗又瓦の日亦燒くなを當日は其夜凍瘡生ずべきなり
○暑中氷を貴者あり是を須へ魚菓物等を冷しあるいは盆に盛
見もの亦別く遠路魚或運ぶ時氷を以て損ぜざる様に致し

魚商人い日く百斤二百斤で買潤へ鮮魚成養へ氷一斤の價錢三四文程 右の氷貯へ
方る寒の内山中陰冷の場所み深さ九二三丈闊さ三四丈の穴を掘内よ
火成焚然地成搗堅め數万斤の氷を入上み石を覆ひ又土を以て氣
扨漏ぜるかゆりて堅く結其上み草葺の假屋を建雨水成防ぐ古是成
氷廠と号く炎暑の時み至ると賣出し

○七月七日成巧日と唱へ露臺 樓の前み架け造り成仕半一三方み棚を付屋根を
成ハ座上み 草成居菓子菓物みく七品 品物さぐ 針七本 糸七ぢ成
供へ糸五色 牽牛織女の二星み供へ夜半み至ると幼女とも拜し年中
供へ糸る針み糸成通ひ古を穿針と巧とす



乞巧奠



○七月七日家〻菊葉菱子茄子蘭花豆等み蘭花豆ハ蠶豆を水に浸し皮を去り四つに割り皮ハ油にて揚る蘭花の形ゝ有る麦の煉形を附油にて揚食し其を巧菓とす○七月十二日夜先祖の亡霊を迎ふとて廳堂の上座に卓を置香華燈燭茶湯飯供膳拜を先祖に接祖先と唱ふ十三日より茶酒飯魚肉雑豆腐温飽其外時候の菓物野菜類を十五日まで日〻改め供ふ中ゝ江南地にて〻十五日一日祭祀に供物等い異ふ事れし且三年の喪あふ内も十二日夜より一日又も日〻僧を請じ誦経を頼む亡霊の者ハ宅にて〻焔口の供養をなすもあり○中元に城隍廟の陰官を請じ祀孤あり清明の時に同じ○七月晦日小の月ハ廿九日地蔵菩薩の誕日より〻ハ傳へ地蔵の願ひ糸清〻暮より家〻門前に卓を置香燈に線香を焚家内の者一人に蠅燭二本宛の積みにて〻ハ二十

挺を竹抗に差地上に立列孫燃すより成地燈とす

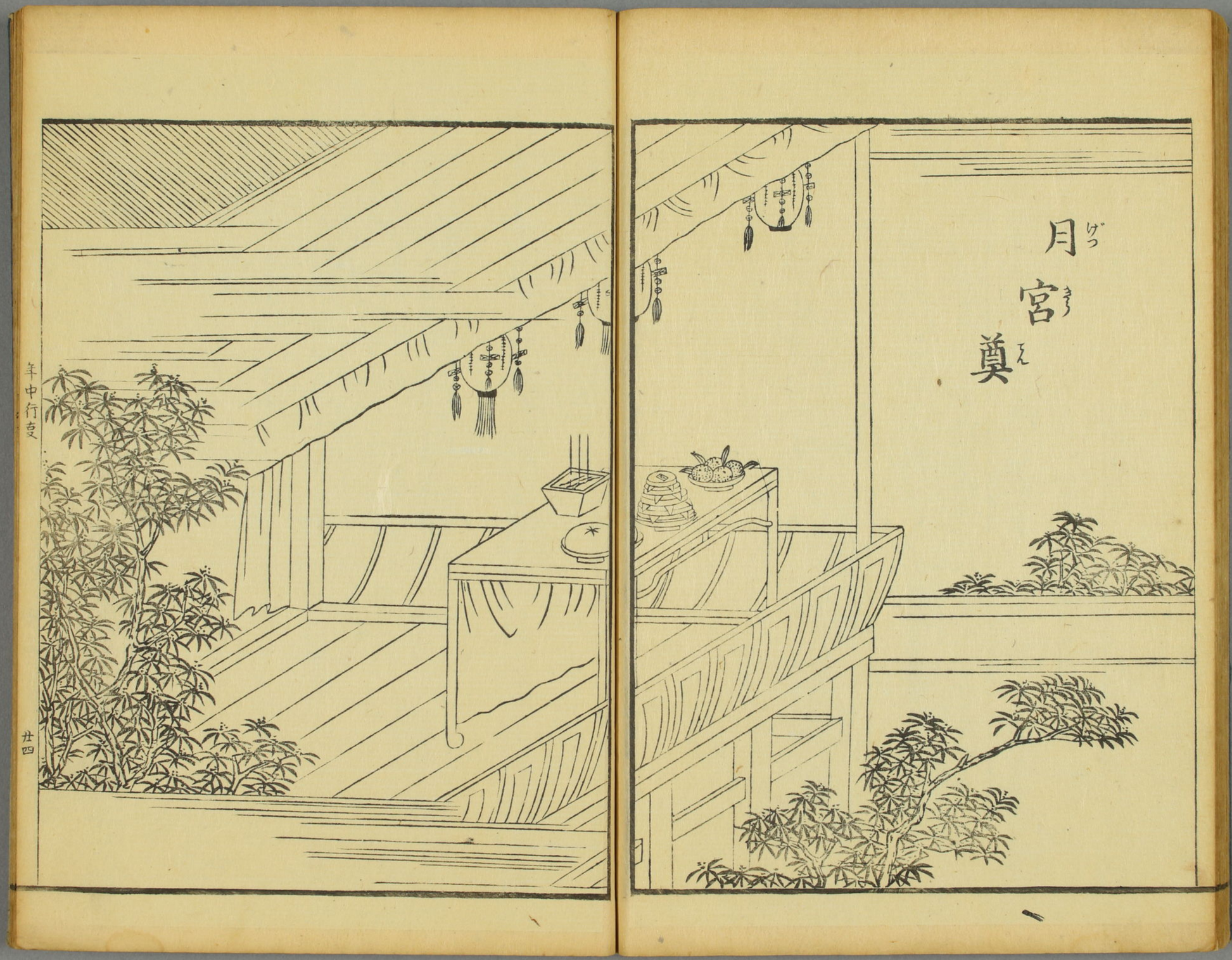
○八月三日灶神の誕日にて家〻香燭並に糕を供祭ふ

○八月十五日宮の誕日より傳へ家〻露星に卓に設斗香並に月餅斗香ハ斗に形に造る法を〻線香成を〻ふ月餅ハ麦粉を〻肉に胡麻西瓜の種撒揉仁青皮等を刻白砂糖に穂に交焙り胡麻油にて揚ふ也月輪に像り圍く拔る天に有西瓜梨子柳等圓紀菓物の類成供家内打寄酒食を設明月を賞す内〻朋友等聚り看月會とて酒宴を催もあり

○同日に中秋佳節とて近き親類内〻月餅魚肉梨子栗柿等成互に送ふ

○八月十五夜雨降ハ翌年正月元日晴天ふ上元日雨天〻

○八月十八日成潮生日とて海辺の地方ハ平潮の時刻濱辺に卓を置香燭並に猪羊二種酒三爵を供地方官下層の役人成引領し


月宮奠

跟随を従へ其一羽は来て海面に向ひ二跪六叩首の礼を行ひ拜し了て供物等取収む○九月九日重陽は朋友打ち誘ひ酒食を携へ山上に登り詩歌作り糸竹を弄び終日遊戯を足を登高や唱ふ又菊花酒一羽は東籬の遺風に傳へ賞する者も有同日所に高き二天后廟の前に戲堂を搭へ傀儡し神恩に謝する也あり

○九月九日家々栗糕とて栗の形を拵へ栗肉に刻み餡として糕に造て煮食ス大サ二寸又栗形の如く糕に搭へ陰に遊る数三四十盤に盛て其上に小さき五色の紙旗に十本ずつ立て灶神へ供物を登糕と唱へ

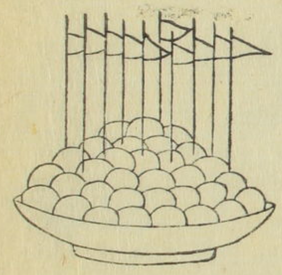
○十月朔日を十月朝と云先祖の墓一羽は清香燭供物等致礼拜を清明祭と云遠い家ごとに赤き供物等も省略ス家廟に供物を備へ

○同日清明中元の如く城隍廟の祀孤あり都て清明中元十月朔此三祀を鬼節と唱へ亡霊を祭祀ス又元旦中秋冬至此三節を人節と云

○十月冬至の節は在京大小の官人年始の如く朝服を着し禁内拜賀ス在外の官人は寺廟に参り竜牌を拜ス一陽來復の節なる故家々酒宴を設け貴賤とも團子を作り吃ス團子一名團糸と云稲米を粉砂糖を餡に入て蒸す

大指の形に圓くして白湯に煮ふ小豆餡に砂糖を餡に入て蒸す

登糕



潮生日
官祭

○十二月四日孔夫子の聖誕あり人々堂上の聖像を掛て香燭を多く
禮拜し三牲等の供物を備ふ
○十二月八日臘八と唱へ菓粥を炊ぐ（一名臘八粥と云竜眼肉栗棗（茨菰）蓮肉等を入て煮ぐ）
檀家へ配る家又人々より家内みな施す者もあり
○十二月十五日過より謝神と云家々六神（六神は翰主地清竜利市招財和合を云
なほ竜利市等の四神は出所不詳）
並びに我信仰の神へ三牲菓物等を備へ年中守護の神恩を謝し
○十二月十五日頃より正月半まで家々爆竹の遺風を行ふ厚紙にて
ちいさく長サ三四寸程の響炮あるいは六七寸ばかり花炮を買入れ家内
みな撒く門前後庭みな夜毎断間なく放ち事なり花炮を常に
もてあそぶ邪氣を逐ふの意なり

○十二月廿日頃より廿五六日迄の内家〻年穐を制表に（稼業の形を茶一砂糖をけき更きき藁竜み入てすび茶に）
必み其形ゆゑに丸さに用ひあるいは三つ四つみあぐ切又は金鍔の形みうらゝあるもあり不分等かゝる寒中みがき制をする事にあるべ

○十二月廿日頃より吉日を撰て掃塵又は打掃と唱へ家屋を掃除を定
日あり家〻吉日を撰だ○十二月廿四日は灶神上天の日とて家〻み
香燭豆腐菓子等を供へ禮拜し神を送る正月元朝み来を同様
み供物して神を迎ふ且年中祭り置くふ灶君の札並びみ聯を右上
天の日み剥元朝来明み新み書張ふ事を札聯を何れも赤紙なり

札

伍方伍帝司命灶君

巍〻聖德乾坤大

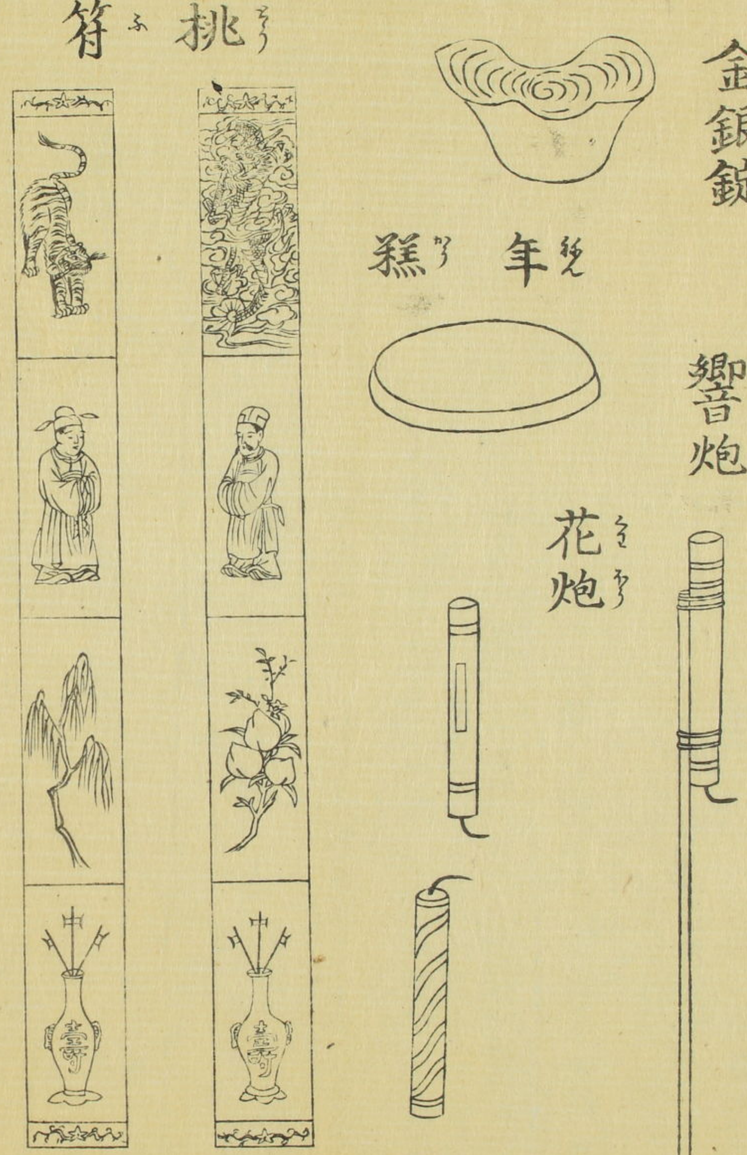
永〻皇圖日月長

聯

○十二月廿四日より親類たゞみ歳暮の贈物として年穐魚肉海参
魚翅胡桃拵餅橘子椒攪竜眼等を送ふ

○十二月廿七日より近き親類の内十歳前後の児女あれば互み年穐椒
攪胡桃竜眼橘子銀子等を送ふ是を押歳錢とふ（大戸は百目程より二三十目迄二挺ら四挺是又半の数を用ひ中小戸は百匁程より二三百匁二百匁程ゝ不同あり）尤歳暮み送ふ者の年始み送ふ且使の者みい
祝儀を遣せ銀又は錢みくも赤紙み包み上み尊使或ら代茶と書只

○同日の頃寺〻より節禮のおくり物として檀家其外とも懇意の向へ
野菜類あるびみ寺中みく割れたる菓子あるいは梅花等の待来
はゝ折枝形ど有合みはゝ世取添へ送ふ大戸の向へは多分ゝ送ふ少へ
其品み應じ銀子をのべく厚く返禮を小戸も其品み准じ返礼あり



○除夜ハ各々官府大戸の向ひ桃符とて聯のやうなる板一對ハ幅六七寸
ばかり長さ六門挂ハ竜虎朝官桃柳平升三級の圖を彩畫ー竜虎の形ハ考註
ハ載せたるなり
二の門の左右ハ掛邪氣ぬぐもの又庶人々歡樂紙とて長さ三尺余幅
一尺程の赤紙ハ上ハ金箔ハくく福の字を切付下ハ四方の縁ハ
花形彫其中ハ種々の紋を彫あるうへハ指日高升加官進爵
福自天來平升三級天官賜福の圖を彩畫切付るなり五枚
右一句の圖を一枚ハ切付五枚ハ一對あり堂の正面上檻ハ張る又官府大戸ハ神荼鬱
壘二神の像邪氣掛ふ塗板の扉ハ畫ハ門神あり
加ふ小戸々版ハ摺るなり神像ハ買又ハ神名ハ赤紙ハ書扉の左
右ハ張ふ且貴賤とも家の正面柱等ハ迎福招慶如意ハ
ハ吉利の句ハ書して貼ふ

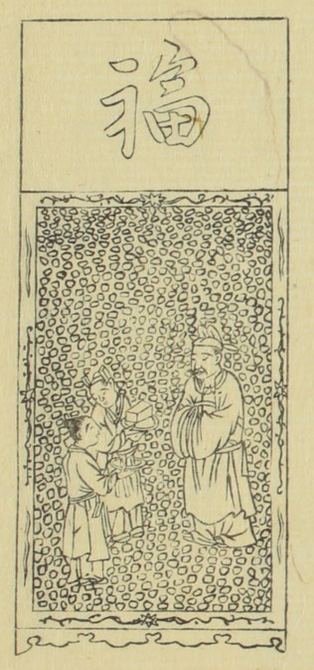
○除夜に家内打寄酒宴を設け年底の祝事を主人より銀又は錢に
て家族殘らず召使の奴婢まで打ふ足を分歳より銀錢ともに
上に小き赤紙を貼ふ也此方にく麿年を分ふ意あり
銀ら一二を殘し百銅二百銅て大戸小戸共より多少等くべ

○同夜に萬年糧と唱へ淘籮二つに米と飯を盛て上に松柏の枝を挿
橘子姜子を至元日より三日まで内室にかざりをく是い家に餘糧
ありて食に乏しきを以表す意あり

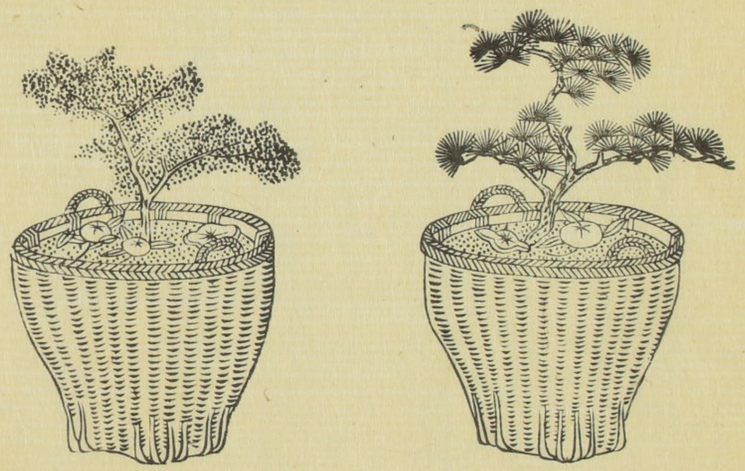
○除夜に人々より歳を守りて寢ざる者もあり

○立春の前日に府州縣とも大歳と春牛を作る太歳一名岱神
小児ども神像を作り裝束をかさり春牛に竹にて高さ三四尺に牛の形をつくり
土にて七八寸の
はりて紙にくるみて彩色に又五寸程の小牛を同しやうにこしらへ大牛の腹内に入置くべし
別に
莨に竹を丈大歳に春牛を挽せ郡外に至其地の牽官い衣服をあらく
免轎子に乗り下屬の吏役ら移りに春花を飾る
梅花桃花等を織
ゆくさきらへさら長さ

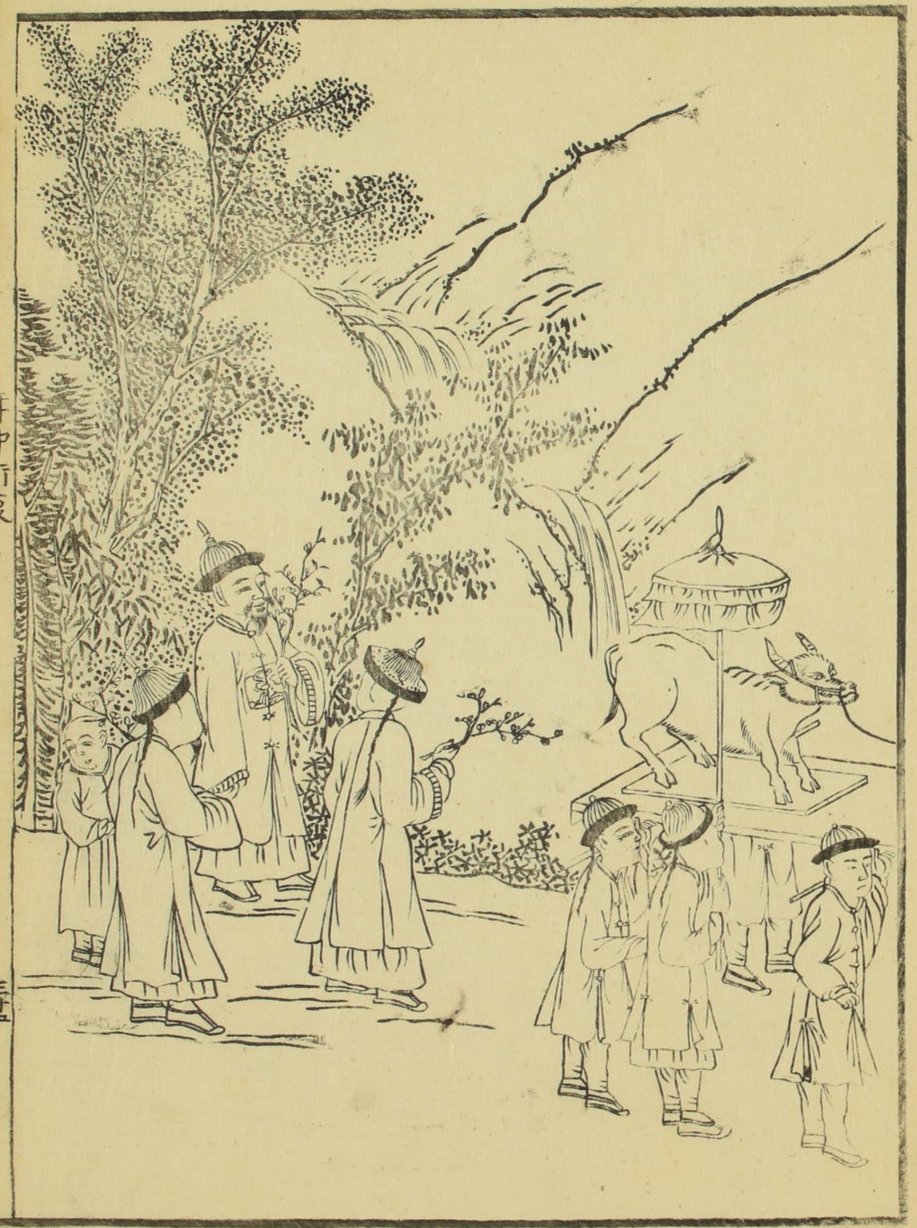
歡樂紙



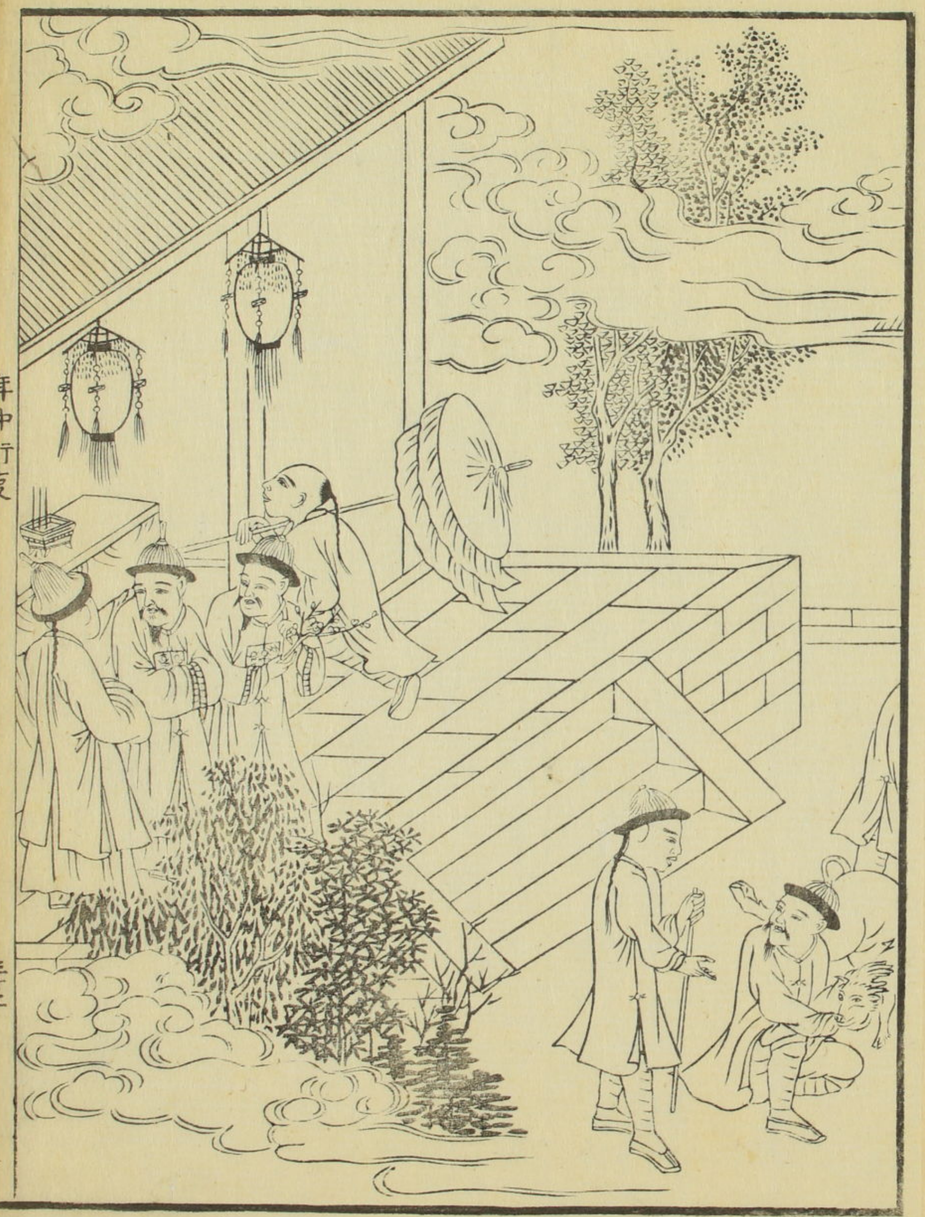
萬年糧



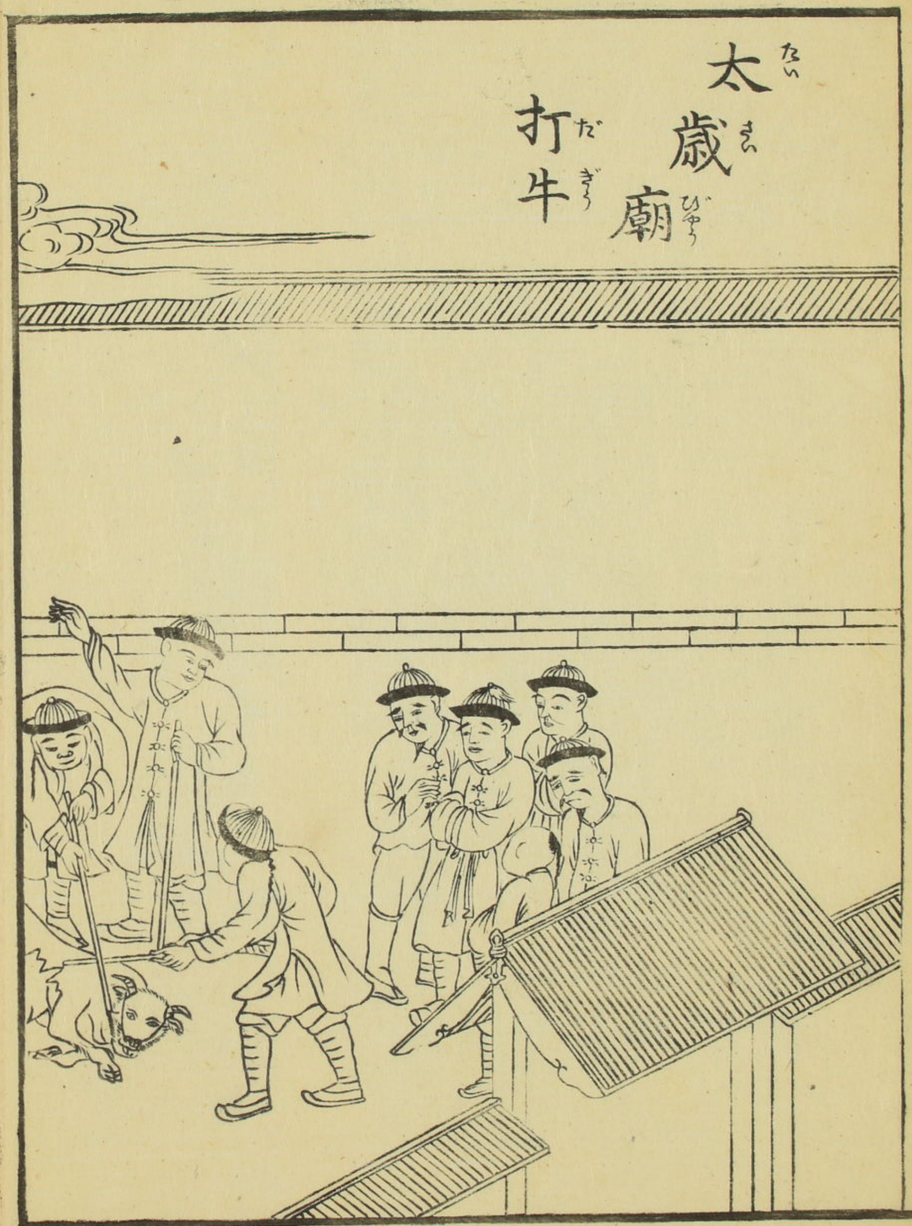
一天子の花枝を出迎へ金鼓を打凉傘を翳し行列〳〵行春とそ者〳〵郊外を経て直に城市に入る古式成迎春と云ふ知府堂上に清じ置絳紗の袋に日之春の時刻に至て清官吏古式成清じ出し下役等銘〳〵竹杖棒或は金鼓を打〳〵守護して廟裏に送る主〳〵太歳を安置し持て棒に大牛をうち屋敷内の小牛成瓦出〳〵太歳の前に居を置豊年の吉端を表す意あり又太歳を廟に送る途中に市中の小児ども大豆を投て牛成打ちはみ打当ひ疱瘡軽〳〵こひ傳ふ



太歳春牛迎春



太歳廟打牛



清俗紀聞卷之一